

## 2024年2月4日 説教「アポロの宣教」

### 使徒の働き 18章 22～28節

パウロはコリント、ケンクレヤを経てエペソにわたり、しばしそこで宣教しました。しかし、促されてシリアの地に向かうことにしたのです。それを聞いて、エペソの人々は留まってくださいと頼みました。パウロは「神のみこころならまたもどってきましょう」と言明し、そこを後にして船に乗り込んだのでした。



#### 1. 挨拶と宣教報告 (22～23節)

##### ① 宣教報告 (22) 「それからカイザリヤに上陸してエルサレムに上り、教会にあいさつしてからアンテオケに下って行った。」

パウロ一行の船は、地中海を越えてシリアのカイザリヤに上陸しました。カイザリヤはローマの地方総督が駐在している地でした。それから、西南に50キロほどの所にあるエルサレムへと上ったのでした。エルサレム教会は牧師であるヤコブや12使徒を始めとした人々、聖霊降臨以降にクリスチャンになった多くの人々が連なっていました。彼はそこで、挨拶と第二次伝道旅行の報告をしました。滞在期間はあまり長くなかったようで、それから北に200キロほど行った所の地、アンテオケに下っていきました。そこにパウロを宣教派遣した教会があったからです。

##### ② 第三次伝道旅行の開始 (23) 「そこにしばらくいてから、彼はまた出発し、ガラテヤ地方およびフルギヤを巡って、すべての弟子たちをカづけた。」

第一次伝道旅行後にはアンテオケに長い間とどまって、弟子たちとともに過ごしました。また、その後にはエルサレム会議(15章)もありました。そこで、第二次伝道旅行に出るまでには相当期間があったのです。ところが、今回はアンテオケにも長居せず、祈りのうちに派遣されて行ったのです。つまり、早速第三次伝道旅行が開始したということです。今度も陸路をとり、おそらくは故郷であるタルソに寄った後に、第一次、第二次伝道旅行で訪問した人々や教会に寄って励ましをしたと考えられます。デルベ、ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケなどの地の教会を巡り、フルギヤへと行ったのです。そこで、彼は弟子たちに御言葉によって語り、元気づけたのです。彼らの信仰確立のためでした。

#### 2. アポロのエペソ伝道 (24～26節)

##### ① アポロ (24) 「さて、アレキサンドリヤ生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。」

アポロはエジプトのアレキサンドリヤのユダヤ人家族の一人でした。彼は雄弁家で、旧約聖書について詳しい人でした。アレキサンドリヤという地名はアレキサンダー大王に基づいています。この人については、パウロが第一コリント 1:12、3:4-6 などに記しています。「私が植えて、アポリが水を注ぎました」とありますが、影響力があったようです。彼がエペソにおいて、宣教をしていたのです。

② 霊に燃えて (25) 「この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。」

アポロは、エジプトに伝わったキリストのついでの教えを聞き、それを受け入れていました。そして、霊に燃えて、誠実に語り、教えていました。ただキリストの福音については伝わっていないこともあり、バプテスマについても、ヨハネのバプテスマのことだけしか知りませんでした。

③ プリスキラとアクラ (26) 「彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。」

アポロはエペソのユダヤ人会堂で語りました。彼の知る限りのことを正確に語ったのです。そこに居合せたのが、パウロが共に天幕作りをしながら伝道をした、プリスキラとアクラでした。そこで、二人はアポロに、キリストの福音について、さらに正確に説明したのです。また、聖霊降臨の出来事や聖霊の働きについて語ったと考えられます。

### 3. アポロのアカヤ伝道 (27~28 節)

① アカヤ宣教へ (27) 「そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、その弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。」

その後、アポロは海を越えて、アカヤへ渡り宣教をしたいという希望を伝え、エペソにいる教会の兄弟が彼を励ましました。そして、アカヤの地にいるクリスチャンには、アポロを歓迎してくれるようにという手紙をも添えたことでした。

② 大いに助け (27) 「彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者となっていた人たちを大いに助けた。」

アポロはアカヤの地に着くと、既に恵みによってクリスチャンとなって、霊的な援助を必要としている人々を教え導きました。

③ ユダヤ人達を論破 (28) 「彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人達を論破したからである。」

アポロは、旧約聖書に基づきながら、イエスがキリストであることを証明しました。そして、ユダヤ人達に対しては、その会堂において怖ることなく、力強く、誰もがいるところで、明確にキリストのことを語ったのです。そして、ユダヤ人達を論破したのです。

### 《結論》

海外宣教委員会に関わって長いのですが、海外宣教というのは宣教師だけではなく、派遣母体や支援者があってこそ成り立っています。派遣側は宣教師の働きの内容や経済や健康などを把握し、支援者たちからの支援金を送るといふ大事な仕事もあります。一方、宣教師は少なくとも4年に一度は派遣国に

もどって、支援者たちに宣教報告をすることが普通です。そして、家族、特に子供達には母国の文化を体験させることが大切なのです。今、ここに使徒パウロはエルサレム教会とアンテオケ教会の人々に挨拶をしたとありますが、宣教報告をして人々に宣教のために祈りの要請をしたものと思われます。今回は、ゆっくりと多くの人々と会うようなことをしていないようですが、現場の必要が急がれているという認識と主の促しを受け取っていたのかもしれませんが、ともかく、かなりあわただしく、第三回目の伝道旅行は開始されています。経済的なことを言えば、母体からの経済支援を受けつつも、いざとなれば天幕作りという仕事をしながら宣教をするという覚悟もあつたでしょう。また、向かっていく宣教地の諸教会からの支援も期待できたかもしれません。そこは委ねて出発したのでしょう。今年も、日本長老教会では7月第一週を世界宣教週間として、宣教師達のことを覚えて、礼拝をささげることになっています。宣教師たちのために祈っていきましょう。

今朝の聖書箇所には、パウロの宣教とともに、アポロの宣教について記されています。アポロについては、第一コリント 3:4 においてパウロが、「ある人が『私はパウロにつく』といえ、別の人『私はアポロに』と記しているほどに、影響力がある宣教者でした。そして、パウロが「私が植えて、アポロが水を注ぎました。」(3:6)と記しているように、重要な仕事をした人であることがわかります。ただ、彼はアレキサンドリヤで歩んできたがゆえに、キリストの福音と御霊の働きについては十分な知識がありませんでした。聖霊降臨のことや御霊の働きについても伝わっていなかったことと思われます。

しかし、彼は伝わっている範囲で真剣にイエス・キリストが救い主であることを伝えました。その中でも25節に「霊に燃えて」とあることに注目したいと思います。聖霊の働きについての十分な理解を持たないアポロでしたが、霊に燃えていたのです。それはパウロが「御霊によって歩みなさい」(ガラテヤ 5:16)とあることや「聖霊に満たされなさい」(エペソ 5:18)を実践していたといえるでしょう。彼が聖書的に語っていたということにも関連があると考えられます。いずれにせよ、彼は知らされている範囲で精一杯伝えていたのです。それはバプテスマのヨハネなどにも通じています。ヨハネの場合は、キリストの十字架も復活も聖霊降臨も知らずに召されていきましたが、悔い改めを説いて用いられました。アポロは使徒達との接触はなかったようですが、アクラなどから教えられながら、重要な宣教活動をした人でした。

私たちも、キリスト御自身に、直接お会いしたわけではありません。しかし、聖書を通してイエス・キリストを知らされています。終末のことや、御国のことも、十分に知っているわけではありません。しかし、聖霊の時代に生きている私たちです。「御霊に導かれて歩みなさい」とも教えられています。御霊の実(愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制)も約束されています。父なる神を崇め、キリストを主とし、御霊なる神にゆだねて歩いていく時に、アポロが「霊に燃えた」と同じように歩めると考えられます。主を仰いで、主にある兄弟と共に歩み、今週も聖霊の力をいただき、寒い中ですが、進んでいきましょう。